

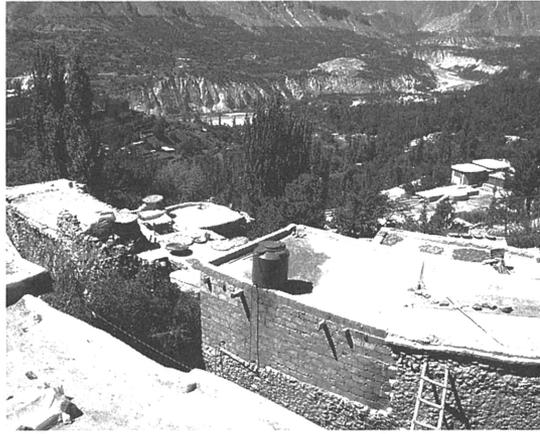
# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## ブルシャスキー語を話す人々 (リレー連載・先住民たちの現在 23)

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn<br>出版者:<br>公開日: 2015-10-26<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 吉岡, 乾<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="http://hdl.handle.net/10502/5829">http://hdl.handle.net/10502/5829</a>                   |

杏乾しの風景（屋根の上の円形に並べられているものが杏）



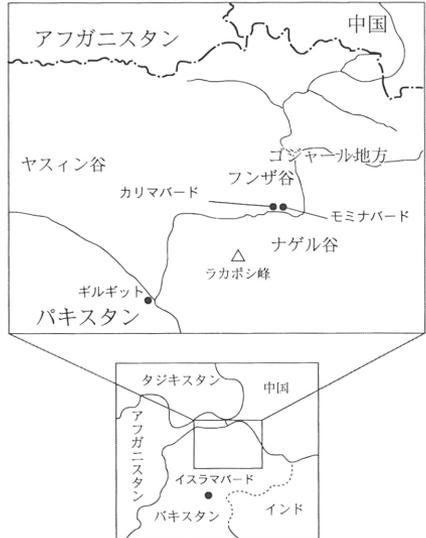
北緯三十六度十五分・東経七四度四十分・海拔二四〇〇m。パキスタン北部地域ギルギット県の中に位置する谷の一つ、フンザの、中心的な町であるカリマバードはそこにある。

「桃源郷」と称される、世界三大長寿の里の一つ。ジェームズ・ヒルトンの小説『失われた地平線』に登場する、「シャングリ・ラ」のネタ元であると言われ、或いは宮崎駿の映画『風の谷のナウシカ』の、「風の谷」のイメージ

[リレー連載]

## 先住民たちの現在

〈 23 〉



の元なのではないかと噂されていたことすらある。朝起きて宿の部屋の扉を開けば、出迎えるは、溪流川下の方角に威風堂々とラカポシ峰（七、七、八m）。振り返って傾斜の上を見やれば、十五年前に登山家・長谷川恒男が遭難したウルタル峰（七、三、八m）が望める。そんな谷が、フンザである。

そのフンザで話されている言語の内の、最大の言語がブルシヤスキー語（Burusshaski）であり、筆者のブルシヤ

スキー語調査はカリマバードを中心にして行われている。ブルシヤスキー語は言語的系統関係が判っていない言語の一つであり、ブルシヤスキー語を話し、言語名を提供している民族であるブルシヨ人 (Burnsho) も同様に、民族的系統関係が判っていない。特徴的なのはその瞳で、西洋人を髣髴とさせる青や緑の虹彩を持つ者が多く居る。これもまた一部の、推測のみの噂話だが、かの有名なアレキサンダー大王の大遠征、その際に現地に残った兵士を先祖としているのではないかという風聞も、実しやかに、そして時には伝説的に、流れている。数多く立っている噂も、フンザの神秘的な魅力に起こさせられているのだろうか。とは言え、彼らも今は伝説を生きているわけではない。精を出したり出さなかつたり、毎日を働いたり遊んだりして暮らしている。

ブルシヨ人は主に農業・畜産・木工を生業として来ている。勿論、その他に狩猟・漁撈などもするし、現代では観光業（登山・観光）が主要な仕事である。中国とパキスタンとを結ぶカラコラム・ハイウェイ (KKH)・カシユガル (中国)——ラーワルピンディー／イスラマバード (パキスタン) 間の一九七八年の開通以来、この地域は急速に現代化したと言われており、生活文化も変貌したことが推測される。特に、カリマバードの山側の隣町であるバルティットがかつて、フンザ王国の王 [than] の在す「首都」

Yoshioka Noboru

## ブルシヤスキー語を話す人々……………吉岡 乾……………

であった為、新文化の到来、旧文化の喪失も取り分け早く、そして速かったことであろう。今や王城バルティット・フォートは、観光地化したフンザの中でも屈指の観光スポットだ。

観光以外の各産業の中で特に民族性が色濃いののは、木工である。そして、その際に関連して語られるべきは、カリマバードの川側の隣村であるモミナバードであろう。この村は、恐らくロマ人（いわゆる「ジブシー」と同系であると推定される、ドマ人という民族が構成していて、彼らは鍛冶業に秀でている（現在、彼らもブルシヤスキー語を日常語としている）。ブルシヨ人の木工業とドマ人の鍛冶業とが、昔から今に亘って、見事な相補的分業をなし続けているのである。なお、ブルシヨ人もドマ人も、音楽家集団という側面を持っているが、しかしその音楽もやはり、楽器の種類やリズムからして、互いに別物である。

フンザにはこの様に、ブルシヨ人の他にも多くの民族が共存している。溪流フンザ川沿いにKKHを溯った、上フンザ（ゴジャール地方）には、ワヒー語を話すヒク人（ブルシヤスキー名で、グイチョ [gutchō]）、隣村にはドマ人（同じく、ベリチョ [Berichō]）が、そして下流にはシナー語を話すシーン人（同じく、シェーン [sen]）が住んでいる。更にブルシヨ人の中でも幾つもの部族 [foimiching] が存在し、冠婚葬祭は基本的に、部族内で協

力し合つて催されている。例えばカリマバード辺りには四つの部族、ディラミティン [diramiting]、ブローン [burtoŋ]、バラタリン [barataling]、クルクツ [qharukuc] が住んでいる。

或る日、周辺で最も見晴らしの良いバルティット・フォートで日向ぼっこをしていた所、近くの高台に一人の男が駆け上がつて行つて、大声で何かを叫び出したことがあつた。彼はチャルプ [charpu] といい、集落の、言わば放送係を担う公務員だ。チャルプは集落で一番高い場所へ行き、声を張り上げて集落中に伝達をする。その時の情報は訃音であり、「××に住んでいる○○さんが亡くなった。ブローンは葬儀の準備に掛かれ」といった内容であつた。亡くなった○○さんがブローン族の一人であつたことが判る。数分間叫び続けて、彼は高台から姿を消した。拡声器も使わずに集落中に声を響かせる彼のアナウンスは、多くて週に一、二度は聞かれた。大概是訃報であつた。

現在、ブルシヤスキー語は別段、学校で教育されているわけでもないし、新聞・雑誌などが発行されているわけでもない。そもそも、ブルシヤスキー語には文字が無い。パキスタン南部の都市カラチの、カラチ大学に程近い集合住宅の一角にある「ブルシヤスキー語研究所 (Burusshaski Research Academy)」の役員など、ウルドゥー文字を元にして考案されたブルシヤスキー文字を使おうとしてい

## ブルシヤスキー語を話す人々

る人々も居るが、音韻特徴を考慮すると決して適当ではないその文字は、普及に難いであろう。フンザでの調査中、文字に起こそうとする話者が居ても、大概はラテン文字に記号を加えた表記を用いる。ブルシヤスキー語に関する欧文研究書を見て、見真似で表記法を借用しているのだ。だがしかし、それにも数種類の書法があり、広く普及した正書法というのには存在しないと言える。

但し、物理的な言語保存を受けていなくとも、地域共通語としては力強く、フンザに住んでいるブルシヨ人達の日常生活は、全てがブルシヤスキー語で賄われている。勿論、子供達も習得しており、彼らが学校で習っている国語のウルドゥー語ですら、町の中では全く聞こえて来ない。隣村のモミナバードでは、彼らドマ人の民族語であるドマキー語 (インド・ヨーロッパ語族) が、ブルシヤスキー語に淘汰されつつある状況にある。ウルドゥー語を使用できないドマ人の老人もブルシヤスキー語は必ず使用できるし、中年以下の男性や子供達は最早、ドマキー語を僅かな語彙しか知らない。フンザ谷に留まらない範囲で、ブルシヤスキー語の地位はそれ程にも強く保たれている。人口的にも保存力的にも、ブルシヤスキー語は「消滅の危機に瀕している言語」ではない。

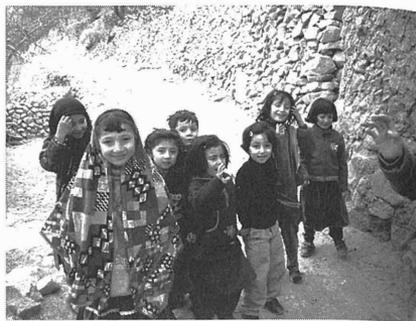
それでも一方で、ブルシヤスキー語への、ウルドゥー語からの影響も隠せない。新しい事物と共に語彙を取り入れ

## ◆ブルシャスキー語の特色

ブルシャスキー語はパキスタン北部地域、フンザ、ナゲル、ヤスィンという三つの谷で主に用いられており、大まかに、谷ごとに方言差がある。言語系統は不明で基本語順はSOV、膠着的な分裂格言語。高低アクセントを持ち、反り舌音や反響語(echo word)などがインドの言語特徴として見られる。子音  $\chi$  [ɕ] が通言語的に珍しい。名詞クラスが四つあり、概して、ヒト男性、ヒト女性、具体物、抽象物がそれぞれに分類される。妖精や魔物は、ヒト女性か具体物かに属す。一部、所属主を義務的に明示しなければならない名詞、形容詞があり、例えば a-ríŋ 「私の手」、gu-ríŋ 「あなたの手」(a-「私の」、gu-「あなたの」)に含まれている名詞要素 -ríŋ 「手」は、単独では用いられない。数詞は20進法と10進法との組み合わせになっていて、例えば「494」は, wálti tha ke wálti áltar túrma wálti ((「4」×「100」&「4」×「20」+「10」+「4」)となる。

以下、フンザ谷の方言での、簡単な会話フレーズを紹介する。assaláam aléikum 「こんにちは」、léei 「やあ (男性に)」、séei 「やあ (女性に)」、be hal bilá? 「元気ですか?」、šúá báa. 「元気です」、bésan gufk bilá? 「お名前は何か?」、jáa eék áli bilá. 「私の名前はアリです」、awá 「はい」、béya 「いいえ」、qhudaayáar 「さようなら」、hík ke guyeéšam. 「またお会いしましょう」

面白い表現としては、何かを失敗した時の「しまった! / しくじった!」に妥当する表現があり、jáa huk šiyam! と言う。意味は、「犬を食べてしまった!」である。ブルショ人の食材に犬は含まれていない。また、「良い人ではあるのだが、どこか今一つ」である人は、híran šúá báí, isúmal apí. 「人は良い、尻尾が無い」と蔭で言われてしまうだろう。尻尾まで生えた「完璧な」人には、いまだかつてお目に掛かったことがないが。



フンザの子どもたち

ることは致し方無いことだが、ブルシャスキー語でも表現できるフレーズに、ウルドゥー語語彙が混ざり始めているのが窺える。往來の少ないこの地域ではブルシャスキー語が大言語であり、周辺言語へと語彙を提供する側であった。だが、往來が多くなってから文化的に外部と同化し始めたこの地域で、今後、外來の流れの中、ブルシャスキー語がラカポシ峰の如く泰然と立ち続けていられる保障も、案外、そんなには無いのではなからうか。時代を超えて言語を伝えてくれる文字の無いことが、ここにおいて、少し痛い。

(東京外国語大学大学院修士課程 / 言語学)